

分子構造総合討論会豊中キャンパスで開催

9月27日－30日に大阪大学豊中キャンパス共通教育棟で分子構造総合討論会を開催した。討論会実行委員会、日本化学会、日本化学会近畿支部の共催である。この討論会は第何回という通し番号をつける習慣になっていないが、1968年以降の毎年の開催地が記録に残っていて、それだけでも今回は第32回目にあたる。この前に基礎工学部で開催されたのが1986年であるから、13年ぶりの阪大開催である。1996年（福岡）に世話人連絡会で大阪開催をお願いし、97年（名古屋）、98年（松山）を経て、今年実現した。阪大には豊中キャンパス（理学研究科、基礎工学研究科）、吹田キャンパス（工学研究科、産業科学研究所）ともに物理化学関係の研究者が多くおられ、今回の開催を支持してくださった。実行委員会は理学研究科物理化学関係の教授6名と助教授、講師の方々と構成し、プログラム編成には阪大理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科、産業科学研究所、大阪府立大学、大阪市立大学、関西学院大学、神戸大学、姫路工業大学の先生方のご助力を仰いだ。九州、名古屋、愛媛の先生方は運営のノウハウを下さった。

今回も1000名を超える参加者があり、日本の物理化学関係研究者が一同に集まる大研究集会として機能した。金森順次郎前総長が磁性の講演を引きうけて下さり、サイエンスの面で阪大の特色を出された。分子熱力学研究センターの徂徠教授は招待講演で物理化学全般における熱測定の意義を示された。懇親会では宮西研究科長が大阪大学を代表して歓迎の挨拶を述べてくださった。また使いよい共通教育棟は会場として大変好評であった。

現在豊中キャンパスでは五つの大掛かりな建築が行われている。これは三年前に阪大開催を申し出たときにはなかったことで、実際、予定した部屋の一つが工事のために使用不可ということになった。また工事騒音、ダンプカーの行き来なども心配されたが、実務担当者の工夫と努力でうまく解決された。事務局総元締めは稲葉さんが担当した。1000名を超える学会のマネージメントは、多種多様な難題の寄り集まった超複雑系であるが、彼の卓越した秩序形成能力と責任感と忍耐によってカオス化の危険を免れた。その様子は稲葉さんの寄稿「1999年分子構造総合討論会事務局を担当して」に活々と描かれている。各研究室の方々は、実験指導と授業への干渉に苦慮しつつ、自分の研究時間を討論会の準備と実行に割いて下さった。現場では院生・学生諸姉諸兄が先生方の指揮のもとに会場運営にあたられた。共通教育機構事務の方々には現場で動きやすいよう配慮を頂いた。また我々熱学レポートの関係者に縁の深い科学技術社（東京）の松本さんは、遠隔地にも関わらず、運営に便宜をはかってくださった。討論会の実現に力を尽くされたすべての方々に感謝します。

（松尾隆祐）

「1999 分子構造総合討論会」事務局を担当して

豊中キャンパスの共通教育機構講義棟を講演会場として、標記学会が9月27－30日に開催された。実行委員長は松尾隆祐教授である。事実上は、理学研究科化学専攻の北ブロックと南ブロック併せて物理化学6研究室（大野，笠井，中村，松尾，山口，徂徠の各研究室のスタッフ23名）が中心となって、その世話を当てることになった。その事務局を担当した者として、ここに印象を記しておきたいと思う。

準備に立ち上がったのは2月末であった。参加者が1,000人規模の学会としては、遅い立ち上がりであったことは間違いない。5月中旬の講演申込締切り、8月の要旨集発行・送付を経て、あっという間に会期を迎えたのであった。この7ヶ月間、事務局にいて様々な場面に出会うことができた。しかし何と言っても、事故なく病人もなく終えることができたのは良かった。今のところ「暑い」という以外に、これといった不満が聞こえてこないのは一応の成功という証拠であろう。

大きな山は、講演申込時にやってきた。最終的には701件の一般講演申込を受理したのだが、郵便による2件の申込を除いては、すべて電子メールによるものであった。事務局が素人集団であったこと、準備不足もあって自前のサーバーを用意せず、その処理には化学科のサーバーを使わせていただいた。山口教授や豊田氏をはじめ担当の方々を、最後までハラハラさせたのは申し訳ない次第である。結果的にはサーバーの大幅なダウンもなく、他への迷惑も最小限で済んだ。運が良かったようだ。

その受付期間は實際上、約2週間あった。しかし、当然ながら申込は締切り間際に集中し、半数は締切日当日の申込となった。その夕刻には数秒に1件の割合でメールが送りつけられた。問題のないメールだけではなく、初めてメールを使ったかのような、正直なところとんでもない申込者もいた。具体的には、同じ申し込みを別のフォームで何度も送られるの（重複登録）には閉口した。それには実時間で対応するしかなかった。つまり、ログを観察しながら訳の分からないメールには、逆に問い合わせのメールを送った。一刻を争う場合には、電話で問い合わせたこともあった。ちなみに、申し込み時だけで事務局への問い合わせメールは450件に及んだ。締切り間際のあわてぶりが分かっていただけだと思う。

締切り日の深夜、24時は実にスリリングであった。手伝ってくれた院生の崎里、竹井両君（いずれも松尾研）と明石標準時の表示を横に、メールによる受付をぴたり24時に終了した。とは言っても、結局はさほど非情なこともできず、ログを見ながら遅れた申し込みも受けざるを得なかった。この点、事務局はもっと非情でなければと反省するところである。ともあれ集計後、一番電車で帰宅するため待

兼山を下りながら「ひと山越えた」という奇妙な満足感に浸ることができた。実際のところは、一週間後のプログラム編成委員会の間に申し込んだ先生もおいでになった。また、プログラム編成後も様々な変更要求（たとえばポスター発表から口頭発表へ、発表日の変更など）を受理せざるを得なかった。なかなか非情にはなれないものである。

今回は、口頭発表時間に変更を加えた。昨年までの18分（13分の講演プラス5分の討論）を20分とし、討論時間を7分に延長した。これによって、分刻みの複雑な時間表を気にすることなく、しかも討論会としての意味を少しでも出せたのであろうか、この処置はかなり好評であった。1日の発表件数を減らした分、昼食時の休憩時間などに余裕ができたのも良かったかもしれない。あるいは、ポスター会場が口頭発表会場のロビーであったため、移動時間がなく余裕を生んだのであろう。

特別講演は、名誉教授の金森順次郎先生にお願いした。講演題目は「遷移金属合金・化合物の電子構造と磁性」であった。会場となったイ号館講堂は、階上席まで満員の盛況ぶりであったが、パイプ椅子を持ち込むなどして何とか聴衆を収容できたのにはホッとした。招待講演は7件、そのうちの1件は徂徠教授による「電子が直接的に関与する相転移の分子熱力学」であった。今回、主催者側の頭を最後まで悩ましたのは口頭発表会場の狭さであった。一般講演は6会場を平行して行ったのだが、各会場は定員が約120名であり、単純計算しても参加者全員を収容しきれない。対応策として、半分の会場で、ビデオにより別室にOHPの映像と音声を転送することにしたのであるが、それでも1会場200名までであった。また、その部屋では質問ができないなど、不満が出るのではとの不安が最後までつきまとった。

しかし一方、会場で立ち見ができるという現象は、講演者にとっては気分の悪いものではない。逆に広すぎる会場では、討論する空気が薄れるのも事実であろう。そんな中、ビデオ転送について当日、興味深い現象を発見した。当然満員になるであろうと予想されたある招待講演が始まる前に、ビデオの部屋に連れ立って入っていく若い人達がいた。彼らが言うには、満員の部屋にいるより気楽に講演が聞けると言うのだ。なるほど、そういう評価もあるものだと思った。これについては多数の反論があるかもしれない。しかし、そういう聴衆が世話役を助けたのも事実である。

いよいよ懇親会となった。ほぼ300名の参加とあって、直前に予算を増やしたのは正解であった。食欲というのは、なかなか馬鹿にできないもののようである。これについては事前に、料理の出し方には秘策があると聞いていた。血糖値を上げる料理を最初に出す。そうすれば、それ以降は出席者の食欲が減退し、結果的に安上がりになるというものである。しかし結局、ホテル側に全てを任せることにした。出席者の胃袋の状態がどうであったかは知る由もないが、会の雰囲気も含め、かな

り満足していただけたようである。

最終日の後片付けを終え、スタッフで打ち上げ会をしたときの写真には、皆の顔に疲れと共に何となく安堵感が漂っていると見えるのは自分だけだろうか。この場を借りて、会場関係で奔走していただいた江口氏、池田氏にはとくに感謝したい。要旨集関係では吉岡氏、大山氏にお世話になった。会計では斎藤氏の手を最後まで煩わせた。長野氏にはアルバイト学生の統括を、山室氏には懇親会の準備をお願いした。スタッフ23人に加え、手伝っていただいた学生諸君のパワーも忘れることができない。また、大阪大学生協には様々な局面で無理をお願いし、ご協力願った。来年の世話役は東京大学で、既にかかなりの改革を予定しておられるようである。われわれが3月に開設したホームページのヒット数は6,500を超えた。便利な、しかし恐ろしい時代ともいえる。時代とともに学会の運営も必然的に変わっていくのであろう。

振り返ってみて、今回の最も大きな収穫は、このようなイベントによって物理化学6研究室が一丸となって動けたことではないだろうか。それが何よりも、後に残る大きな財産かもしれないと思っている。

(稲葉 章)

